（様式）

令和７年度　学校評価　学校関係者評価書

学校名	三木市立別所中学校

１ 学校教育目標

心豊かに　何事にも主体的に挑戦し　創造できる生徒の育成

（１）子どもたちの挑戦や自己実現を支える学校　（２）安心･安全で、規律ある学校　（３）保護者･地域から信頼される学校

２　本年度の重点目標

（１）基礎基本の定着を基にした、個別最適な学びや協働的な学びの充実
（２）生徒理解に基づいた生徒指導
（３）自他を大切にする道徳・人権教育・特別支援教育の充実
（４）特別活動における学校行事・生徒会活動・部活動の充実
（５）保護者・地域との連携
（６）美しく、生活しやすい環境づくり
（７）小中一貫教育推進校としての繋がりのある9年間を見通した教育活動

３　自己評価結果（達成状況）【　Ａ：達成している　Ｂ：概ね達成している　Ｃ：あまり達成していない　Ｄ：達成していない　】

評価の観点		評価項目（取組内容）	取組(達成）の状況	評価	改善の方策
学習指導	①	基礎基本の定着をはかる学習指導の工夫・研究	① 今年度は、９年間を見通した授業づくりをテーマに、基礎基本の定着を図ることを重点目標とした。国語や数学、英語の授業では、小テストによる基礎基本の定着と、主体的に学ぼうとする姿勢の育成を目標に、学習内容の復習を授業の初めに取り入れた。さらに、小中での連携を通じて、中学校に入学してから有効となる学習内容を、小学校に具体的に提案し、家庭で取り組む自主学習の内容として示した。これにより、小学校から中学校への「つまずき」を軽減する取組を進めた。 モジュール学習では、AIドリルを活用し、生徒一人ひとりの理解度や学習到達度に応じて、それぞれが必要とする学習課題に取り組んだ。	B	① 授業での小テストを毎回行ったことで、宿題だけではなく、先を見通した学習を意識できるようになったと感じている。 今後も、このような基礎・基本の定着を図る取組を継続していく。
	②	補充学習と家庭学習への取組	② 数学・英語を中心としたStep Up Time（放課後の補充学習）では、基礎的な学力をつけることを目的として学習に取り組んだ。自主的に参加する生徒もおり、個々の苦手克服に向けて学習を進めることができた。 ３年生を対象とした放課後学習のJump Up Timeでは、自主的に参加する生徒が多く、個々の学習課題に前向きに取り組む姿が見られた。 また、定期テスト前に生徒会が中心となって、学習時間を記録する「study × color プロジェクト」に取り組んだ。		② Step Up Timeにおいては、週１回の時間を安定的に確保できるよう努め、計画的に実施していきたい。 Jump Up Time は引き続き実施し、生徒のニーズに合わせて効果的に学習を進められるよう工夫していく。 また、Study × Color プロジェクトでは、生徒会の活動ということもあり、生徒たちが自主的に取り組む様子が見られた。
生徒指導	①	生徒理解に基づいた生徒指導の推進	① 普段から生徒との関りを大切にするとともに、カウンセリング等を活用して、問題行動の未然防止に努め、発生したトラブルに対しても早期に対応することができた。４年目となった校則を見直す活動では、全校生徒で話し合う機会を持ち、変更内容に生徒の意見を反映させることができた。また、今ある校則についてもその必要性を話し合う質の高い取組を行うことができた。	B	① 引き続き個々の生徒理解に基づいた丁寧な対応を行い、問題行動の未然防止に努めていく。SNS等のネットモラルについては、生徒の実態を把握しながら、適切な情報モラル指導や研修を計画し、継続的に実施していく。タブレットやスマートホンの利用方法については、生徒会とともに適切な発信方法を検討していく。校則等の見直しをはじめ、学校生活のあらゆる場面で、生徒が主体的に学校生活を営むことができるよう支援していく。
	②	関係機関と連携した不登校への取組	② 毎週不登校対策委員会を開催し、情報共有とケース会議等を行ってきた。一昨年度から始まったサポートルームを、生徒の居場所づくりとして有効に活用することができた。今年度から週４日、不登校対策支援員が配置され、生徒が過ごしやすく、話しやすい環境を整えることができた。適応教室、学校生活支援教員、スクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカー、スーパーバイザー、子育て支援課等と連携し、対応を進めているが、不登校の要因や背景が多様化する中、状況が改善に至らないケースもあり、今後も継続した取組が必要である。		② 不登校問題については、その要因や背景が多様化しており、対応が難しいケースが増加している。社会的な自立に向けて、個々に応じた目標を検討し、様々な角度から支援方法を考えていく必要がある。学習面で不安を抱える生徒も多く、サポートルームを有効に活用するなど、一人ひとりに応じて、可能な範囲で設定できる自主課題を提案し、不安解消に努める。
道徳・人権教育	①	道徳教育の充実	① 読み物資料を中心に各学年でローテーション道徳を取り入れ、教師の指導力の向上とともに、生徒の学習状況や道徳性に係る成長の様子を複数の教師の目で見取り、多面的・多角的に生徒を把握することができた。 教科書変更に伴い、年間指導計画を見直し、学年段階に応じた系統的な指導を行った。また、教科書に示された多様な教材（現代的課題、実話教材、複数視点で考える構成等）を活用し、生徒が主体的に意見を交流できる授業づくりを進めた。 全校道徳として「震災に学ぶ」授業を実施し、各学年の発達段階に応じて震災をテーマとして考えを深める授業を行った。長期休業中には、「心かがやく」を家庭に持ち帰り、生徒自身の感想とともに保護者にもコメントを記入してもらうことで、家庭において道徳的価値について話合う機会となるよう連携を図った。	B	① 生徒の道徳性に関する変容を、授業のなかだけで見取ることは難しく、日常の行動や言動にも表れにくい。そのため、日常の教育活動において「継続的」な視点で、長期にわたり子どもの変化を見続けていく必要がある。また、全校道徳などの機会を活用し、授業で取りあげたテーマについて家庭でも考え、話し合う機会を増やしていくことが重要である。 道徳授業のさらなる充実に向けては、新教科書の教材をより効果的に活用するため、発問の工夫や話合い活動の質の向上が課題である。教材研究や校内研修を継続し、新教科書の特性を生かした指導方法の共有を進めていく。さらに、小学校からの学びの連続性・系統性を考慮し、９年間を見通したカリキュラムとなるよう、今後も継続して検討していく必要がある。
	②	人権意識の向上	② 5月には春川先生を講師として招聘し講演をいただいた。私たちの生活と人権をテーマに、今なお残る部落差別問題について考えたり、人のつながりの大切さや、人間の持つ生きる力について考える機会となった。 6月には人権作文標語発表会を開催した。発表者の作品を受け、生徒はその場で考えを発表し、より深める活動となった。10月にはハートフル講演会を開催した。人と人とのつながりがよりよい関係を構築していく大切さを講師の経験をもとにお話しいただいた。周りの人への感謝を忘れず、誠実に生きることの大切さを学ぶ機会となった。12月に全校道徳を行った。今なお残る部落差別問題を自分事として考え、語り継ぐ大切さを学ぶことができた。また今年度は地域防災訓練を行い、避難所運営ゲームHUGを通して、被災者の人権に配慮しながら避難所を運営する活動を行い、人に寄り添い、みんなで助け合う大切さを学ぶことができた。	B	② 毎年行っている人権作文・標語発表会は、お互いの思いや考えを知ることができる良い機会となっているため、今後も継続していく。今年度も同和問題の歴史についての学習を行い、身近に存在する人権に配慮した取り組みについて目を向けることができた。事後指導としては、自分も他人も大切にし、自分たちにできる行動や発言を考え、実践できるよう促す指導を続けていく。人権講演会では、人と人とのつながりがよりよい生き方を導くというお話を聞くことができた。生徒自身の判断や行動が、より良い学校生活を形作ることを今後も伝えていく。今年度取り組んだ地域防災訓練では、非常時の厳しい状況にあっても、お互いを尊重し合う精神が、人々の健やかな営みを作り出すことを学ぶことができた。今後、より手軽に、そして継続して行うことができる方法を模索していきたい。

４　自己評価方法の適切さについての学校関係者評価

・自己評価の方法は概ね適切である。
今年度の自己評価では、教職員の工夫や取組の成果が丁寧に示され、学校全体で教育活動を振り返ろうとする姿勢が確認できる。一方で、やや控えめな自己評価も見られるため、努力や成果を適切に評価し、教職員の働きがいにつなげる視点が求められる。
小中一貫教育の取組は、授業研究・交流活動・カリキュラム連携が着実に進み、本校の特色として定着している点が評価できる。また、PDCAサイクルに基づく改善策も具体的に示され、次年度への見通しが立てられている。
学校評価アンケートについては、前年比較だけでなく回答の傾向も丁寧に分析されており、信頼性の高い評価となっている。今後も、実践の振り返りと客観的データを両面から生かした学校評価を継続し、生徒の成長に資する改善が進むことを期待したい。

５　評価の観点ごとの学校関係者評価

学校自己評価結果及び改善の方策の適切さについての評価
・自己評価および改善の方策は概ね適切である。 今年度も、小中連携による授業研究を通して、９年間を見通した学びのつながりが意識されており、生徒の学習課題を共通理解しながら授業改善が進められている。基礎・基本の確実な定着を軸に、個別最適な学びやICT活用、協働的な学びを取り入れた授業づくりが推進されている点は評価できる。 また、小テストや復習の時間設定など、学習内容の定着に向けた具体的な工夫が日常的に取り入れられ、生徒の主体的な学習態度の育成につながっている。 今後は、生徒の思考の流れや変容がより見える形で示される授業デザインのさらに深い工夫を期待する。 放課後の補充学習においても、基礎的な学力保障を図る取組が継続されている。自主的に参加する生徒も増え、個々の課題に応じた支援が実施されている点は成果が見られる。これまでの取組にAIドリルやタブレットの活用を加え、学習の振り返りや課題把握がより効果的に行えるようにすると、さらに生徒の主体的な取組が促進されるだろう。 今後も、基礎基本の確実な定着と、生徒一人ひとりの学びに寄り添う授業改善を継続し、主体的に学ぶ姿勢を育成する取組を一層推進していくことを期待する。
・自己評価および改善の方策は概ね適切である。 今年度も、生徒理解に基づく丁寧な指導が継続され、規範意識の醸成や落ち着いた学校生活の実現に向けた取組が進んでいる。校則見直し活動では、生徒の意見を反映した話し合いが行われ、生徒主体の学校づくりが促進されている点を評価したい。 不登校対策については、毎週の委員会開催やサポートルームの活用、SC・SSW・不登校支援員との連携が強化され、個々のケースに応じた支援が丁寧に行われている。要因が多様化する中でも、生徒が安心できる環境づくりが進んでいる。 また、SNS利用に伴う課題に対しても、ネットモラル指導の充実を図るなど適切な改善方策が示されている。今後も、生徒の主体性を尊重した指導と未然防止の取組を継続し、関係機関との協働による支援体制のさらなる強化を期待する。
・自己評価および改善の方策は適切である。 今年度も、担任だけでなく全教職員が道徳科の授業に関わり、生徒を多面的・多角的に理解しようとする組織的な体制が整えられている。特に、ローテーション道徳や学年間の授業交流を通して、複数の教員が共通の価値観をもって生徒を見取り、道徳性の育成を継続的に支援できている点は評価できる。また、小中一貫教育として９年間を通した道徳的価値の連続性を意識した指導計画が作成され、発達段階に応じた体系的な道徳教育が推進されている。 教材活用の面では、新教科書の特徴を生かし、現代的課題や実話教材、複数の視点から考える構成など、多様な教材を取り入れた授業づくりが行われている。生徒が自分の考えを主体的に交流し、価値判断を深める機会が増えていることは、生徒の学習意欲や思考の深まりにも良い影響を与えている。 さらに、全校道徳として「震災に学ぶ」授業を実施し、命の尊さや他者への思いやり、人権の大切さについて学ぶ機会を設けたことは、生徒の心に残る実践であったと考える。加えて、「心かがやく」を家庭に持ち帰り、保護者がコメントを記入する取り組みは、家庭で道徳的価値について話し合う貴重な機会となり、学校と家庭をつなぐ有効な取組となっている。 人権教育の分野においても、講演会や作文・標語発表会、防災学習など多様な活動を通して、人権尊重の意識が育成されている。日常の指導と行事を有機的に結びつけながら、身近な場面で他者を大切にしようとする態度を育てている点は、学校全体としての取り組みの深まりを感じさせる。 今後は、生徒の道徳性の変容を日常の生活場面からも継続的に丁寧に見取る工夫を進めるとともに、教材研究や話合い活動の質をさらに高め、指導方法の共有を継続することで、道徳教育の一層の充実を期待する。

特別支援教育	①	支援を要する生徒の理解と支援の充実	① 支援が必要な生徒の状況を的確に把握するため、年度当初に支援を要する生徒の一覧を作成し、全教職員で共有した。また、日頃から職員間で生徒の生活面や学習面に関する情報を共有し、適切な指導やサポートに務めた。さらに、より支援が必要な生徒については、必要に応じて教育支援委員会を開催し、適切な就学や指導を行うことができた。	B	① 支援一覧や個別支援計画・指導計画の共有を定期的に行い、教職員間での認識をより統一していく。また、担任、学年教員、コーディネーター、生活支援教員、関係職員との連携を強化し、支援体制をより実効的に整備していく。さらに、支援が必要な場面や課題が生じた場合には、ケース会議などを行い、適切な支援につなげる体制を確実に整えていく。	・自己評価および改善の方策は適切である。 今年度も、個々の生徒の成長や発達段階を丁寧に把握し、それに応じた支援の在り方が継続的に検討されている点は高く評価できる。年度当初に支援を要する生徒の情報を整理し、全教職員で共有する体制が整っていることで、学級担任だけでなく学校全体で支援方針を統一し、生徒理解に基づくきめ細かな対応が可能になっている。 特別支援学級では、特別支援教育指導補助員や生活支援教員を含めた支援体制が確立され、生徒が安心して学べる環境が整っている。また、必要に応じて教育支援委員会が開催されるなど、支援が必要なケースへの早期対応が実現しており、一人ひとりに寄り添った指導が行われている。 学習面や生活面で困り感を抱える生徒に対して、環境調整や声かけの工夫、個別課題の提示など柔軟な支援が行われており、生徒の自己肯定感の向上にもつながっている。
	②	保護者・関係機関との連携による情報の共有	② 保護者や関係機関との連携を強化し、スクールソーシャルワーカーやスクールカウンセラーと協働して、生徒一人ひとりの状況に応じた情報共有を行った。担任や学年総務が保護者との連携を密にし、必要に応じて福祉機関や医療機関とも連携することで、よりきめ細やかな支援を実現することができた。また、中高連携シートを活用し、高校側と生徒の状況を共有することで、中学校段階で把握した支援ニーズを進学後にも確実に引き継げるよう配慮した。家庭・学校・関係機関が一体となる支援体制が整いつつあり、今後も継続して取り組む。		② 保護者・関係機関から得られる情報を継続的に整理し、校内で共有できる仕組みをさらに強化していく。また、教員間、SC・SSWとの連携を密にすることで、支援方針の一貫性と継続性を確保できる体制を整えていく。さらに、支援が必要な生徒への進学にあたっては、中高連携シートの活用を継続し、高校側との情報共有の精度を高めることで、進路決定後も切れ目のない支援につなげていく。	
特別活動	①	自己有用感を感じる集団づくり（学校行事等）	① 生徒会の企画したスポーツ大会では、Ｉ学期にドッジボール大会、２学期に大縄大会を実施し、クラスで互いに応援し合いながら、勝利に向かって団結する姿が見られた。また、クリーンキャンペーンでは、地域の方々や６年生との交流を通して、自分たちが地域の一員であるという自覚を持つことができた。さらに、自分たちの住んでいる地域を清掃する活動を通して、喜びやボランティア精神を培うことができた。	A	① 生徒がクラスや学年、学校の中など、様々な場面で「他者の役に立っている」と実感できる活動を今後も継続していきたい。 また、クラスの集団作りについては、学活や総合的な学習の時間を活用し、教師間で実践を共有しながら、一人ひとりが生き生きと活躍できる場をつくるよう努める。	・自己評価および改善の方策は適切である。 今年度も、生徒会を中心に学校行事や日常の活動が生徒主体で進められ、体育祭・文化祭では企画段階から生徒が役割を担い、達成感のある行事運営が実現している。加えて、スポーツ大会など生徒会企画の活動を通して、学級・学年の一体感が高まっている点は評価できる。 日常の特別活動においても、あいさつ運動、給食放送、図書運営、保健活動など、生徒が学校生活を支える役割を着実に果たしており、主体性の育成につながっている。地域と協働したクリーンキャンペーンでは、地域の一員としての自覚を育むことができている。 また、生徒総会や話し合い活動を通じて、校則や学校生活の見直しに生徒の意見が反映されており、意思が尊重される環境が整っている。今後も、学校行事の教育的意義を踏まえ、生徒が中心となって計画・運営を進められるよう継続的な取組を期待する。
	②	生徒の主体的活動に基づく生徒会活動の活性化	② Ｉ年の中でも大きな行事である体育祭・文化祭において、生徒会を中心に、昨年以上に主体的に活動する姿が見られた。体育祭では、生徒会が準備段階から当日の司会進行までを担当し、生徒主体の運営を実現した。文化祭では、展示見学時のスタンプラリーの企画や当日の運営など、新たな取組を増やし、成功させることができた。		② 今後も、生徒会が主となり、生徒主体の活動を継続していきたい。ただし、そのためには、教師との打ち合わせや、練習後の反省会議など、成功に向けて取り組むべき課題が多く存在する。生徒が達成感をもつためにも、生徒との対話を重視しながら活動を進めていきたい。また、体育祭や文化祭の種目等についても、生徒自身が企画に関わることができれば、より一層大きな達成感につながると考える。	
保護者・地域との連携	①	通信・HP・懇談会等による開かれた学校づくり	① 学級・学年・学校通信等の発行やホームページの更新などを通して、積極的な情報発信に努めた。また、年３回のオープンスクールや地区懇談会、学校行事(体育祭、文化祭)、ハートフル講演会等を実施し、教育活動の公開と、保護者・地域住民との意見交換の機会を設けた。さらに、地域防災訓練では、9年生が地域の方々と協働し、避難所開設に向けた具体的な検討を行ったことで、地域の一員としての自覚を高める貴重な機会となった。	A	① 行事がマンネリ化しないように、各行事の目的を再確認し、実施形態や時間設定を柔軟に見直すことで、参観者の満足度が高められるようにする。また、オープンスクール等で実施するアンケートで寄せられた意見を速やかに反映し、活動の意義や成果を積極的に発信することで、学校への関心と理解をさらに高めていく。	・自己評価および改善の方策は適切である。 今年度も、オープンスクールや学校通信、ホームページ更新などを通して、保護者・地域に対する情報発信が継続して行われており、学校の取組が分かりやすく伝わっている点は評価できる。地域懇談会や学校行事の公開を通して、学校と地域が対話する機会が確保されており、地域に開かれた学校づくりが進んでいる。また、クリーンキャンペーンや納涼大会への参加、納涼大会での音楽部演奏、別所町民文化祭での作品展示など、生徒が地域と関わる活動も充実している。学校評価アンケートからも、地域行事に参加しようとする生徒の意識が高く維持されていることが確認され、地域の一員としての自覚が育成されていることがうかがえる。 今後も、別所町まちづくり協議会や学校運営協議会との連携をさらに深め、学校地域協働活動の機会を拡充することで、「ふるさと別所」への愛着を育み、地域とともに歩む学校づくりを一層推進していただきたい。
	②	地域行事への積極的な参加によるふるさと意識の醸成（地域 と連携した心豊かな生徒の育成）	② 別所町まちづくり協議会との連携による年２回のクリーンキャンペーンでは、多くの生徒が自主的に参加し、地域住民と共に活動することができた。また、納涼大会では音楽部の演奏、別所町民文化祭では美術作品の展示など、文化面での交流を積極的に図った。さらに、生徒会が地域行事の運営を担ったり、人権教育研究大会において生徒が作文朗読を行うなど、さまざまな形で地域に貢献することができた。		② 生徒会やPTAとの連携を強化し、地域行事の魅力を積極的に周知することで、生徒の自発的な参加を促していく。また、部活動の活動計画との調整を組織的に進め、より多くの生徒が地域行事に参画できる環境を整える。地域の方々との直接的な交流を通して、「ふるさと別所」への愛着を深めるとともに、地域とともにある学校づくりを引き続き推進していく。	
施設・設備の改善と維持	①	心癒される美しい環境づくり	① 定期的な校舎安全点検を行い、生徒たちが安心して学習に打ち込める環境を整えた。特に教室環境においては、「ロッカーの上に物を置かない」など、整理整頓を習慣化させることで、授業に集中できる空間を維持した。また、生徒の学習成果や行事の写真等を積極的に掲示し、視覚の工夫を凝らしたことは、生徒の自尊感情や学習意欲の向上にもつながった。さらに、別所町老人クラブによる花植え活動は、心癒される環境づくりに大きく貢献している。	B	① 自分の使う場所を美しく整えることが、自分自身を大切にすることにつながるという認識のもと、生徒一人ひとりが環境整備を日常的な習慣として身に着けられるようにする。そこから、集中して学習に取り組むことができる落ち着いた環境を継続して構築していけるよう推進する。また、PTAや地域の方々と連携して校内外の環境整備を行い、美しい学校を維持できるよう取り組んでいく。	・自己評価および改善の方策は適切である。 今年度も、教職員が率先して校舎環境の整備に努め、美しい環境づくりの姿勢を示すことで、生徒の清掃活動や整理整頓の意識向上につながっている点は評価できる。ロッカーや机の整頓、教室環境の維持が定着しつつあり、落ち着いて学習に向かう雰囲気づくりにも寄与している。大規模改修により整備された校舎環境を長く維持するためにも、４S（整理・整頓・清掃・清潔）を基盤とした指導を継続的に進め、全校で共通理解を深めながら環境美化への意識を高めていくことが重要である。また、掲示物や花植えなどの取り組みを通して、生徒が環境を大切にしようとする態度が育まれていることも成果として挙げられる。 今後も、生徒が安全で安心して学習に励めるよう、美しい施設環境を維持し続ける取り組みを継続し、よりよい学習環境の実現を期待したい。
	②	整備された環境の維持管理 （積極的な清掃活動への取り組み）	② 清掃分担区において、時間内はしっかりと清掃に取り組むよう指導するとともに、教師が率先垂範して共に清掃を行った。その結果、生徒の取り組む姿勢が向上し、教職員を含め、学校全体で校内美化に対する意識を高めることにつながった。		② 今後は、教師の指示で動く清掃活動から、生徒が主体的に取り組む清掃活動へと移行していくこと目指す。そのために、生徒会活動の一環として全校生に啓発を行ったり、掃除用具等を適切に管理する体制を整えることで、効果的な清掃活動を推進していく。	
小中一貫教育の推進	①	９年間を見通した教育活動の工夫・研究 （基礎・基本の定着をはかる学習活動）	① 昨年度立ち上がった合同研修会議を3つに分けた。1つ目が各教科、2つ目が道徳・特別活動・生活・総合などの教科外、3つ目が授業づくり・基礎学力・家庭学習・授業研究などの研究推進である。基礎学力部会では、小学生に配布する「自主学習の進め方」について、中学教師の意見を取り入れたり、家庭学習部会では、小中が同じ時期に「家庭学習強化週間」を設け、家庭学習の取組時間を可視化し、お互いの頑張りが掲示物で分かるようにするなどの工夫を行った。また、英単語や文法についても、中学校教員が作成した教材を小学校で活用している。	A	① 合同研修会議の中で、協議内容が重複しているものがある。来年度はより効果的に取り組めるように、内容項目を再整理する。様々な取組を進めているが、その効果については判断しにくい。同じ児童生徒を経年的に比較し、取組の効果についても検討していきたい。現在行っている取組をブラッシュアップするとともに、効果が見えにくいものについては積極的に改善を図っていく。	・自己評価および改善の方策は適切である。 小中一貫教育の意義を教職員が共有しながら、９年間を見通した教育活動が計画的に推進されている。特に、「基礎学力の確実な定着」と「生きる力の育成」を２本柱とした取組が継続され、小学校から中学校への円滑な接続を意識した学習指導が効果的に行われている点は高く評価できる。 授業づくりにおいては、小学校６年生と中学校８・９年生による研究授業や、小中合同の授業研究・協議会を開催するなど、教職員同士の専門性を高める場が充実している。互いの授業観や指導方針を理解し合うことで、児童生徒の指導に対する一貫性が強まり、小中それぞれの良さを生かした連携が実践されている。また、児童生徒の交流活動は年間を通して複数回実施され、文化祭での交流や中学校体験等を通して、小学生が中学校生活への見通しを持てるよう工夫がなされている。中学生が小学生に対して丁寧に説明したり優しく関わったりする姿は、思いやりや責任感の育成につながり、双方にとって大きな学びとなっている。 今後も、小中の教職員が互いの専門性を尊重しながら協働し、子どもたちの発達段階に応じた関わりを積み重ねることで、児童生徒の学びの質をさらに高める取組の充実を期待したい。
	②	児童生徒の交流及び職員の合同研修・授業研究	② 目指す12歳・15歳の姿をすべての教員が意識して教育活動を行えるように、中学校の授業を小学校教員が参観できる期間を設けた。また、小学校では６年生国語科、中学校では８・９年生の英語科研究授業を行い、小中合同で授業研究を実施した。それぞれの視点から活発な意見交流ができた。 児童生徒の小中交流を４回実施している。中学校の文化祭に６年生が参加し、１日を中学校で過ごした。その結果、小学生の中学校入学に対する不安が軽減されている。中学生は小学生に対して、わかりやすい説明をしたり、やさしく接したりすることで、相を思いやる姿勢を身につけている。		② 小中の児童生徒の交流は、子どもたちの自尊心の向上や、相手を思いやる気持ちの育成に良い効果をもたらしている。このような活動は、教職員に無理のない範囲で継続的に行うことで、より発展していくと考える。それぞれの発達段階を理解し、適切な交流の形を見極めたい。また、子どもたちへの良い影響を教職員が実感し、この活動を継続したいと思ってもらえるように努めていきたい。	